

現代を鋭く問いかけた台湾の作家たち

「亜細亜散步展」をたずねて

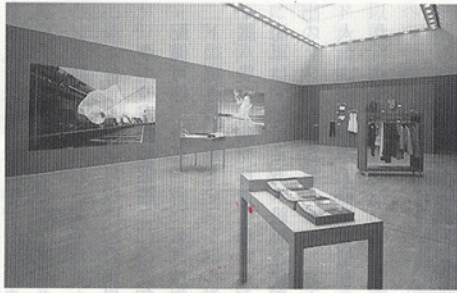
アート・コーディネーター 森美根子

このたび、水戸芸術館現代美術ギャラリーと資生堂ギャラリーの共同主催により「亜細亜散歩展」と題して、八十年代以降に急速な経済発展を遂げたアジアの都市（台北、ソウル、北京、東京）の「今」を見つめる展覧会が開催された。（会期は十月二十一日まで）

昨今の現代美術展は、著名な作家の作品を美術館に陳列する従来のスタイルから、展覧会を企画する芸術プロデューサーが明確な主題を掲げて、そのテーマに沿った作家を選抜き、展示自体を集約的な芸術作品とみなす傾向が主流になってきた。

本展は、浅井俊裕氏、樋口昌樹氏の両氏が「キュート」「アフターキック」を切り口にして、十四人の作家の作品により、高度成長期の後に出現したアジアの各都市の消費社会の様相を照射するものである。

アジア美術が世界の美術界に注目されるようになったのは、わずかに二



王俊傑の作品「微生物学協会：クローニング・プロジェクト」
(写真提供：水戸芸術館現代美術ギャラリー)

十年ほどにすぎないが、多様な文化や宗教や人種が渦巻くアジアの作家たちの作品は、西欧中心の既存の美術的な概念では測れない独自の魅力を放って、世界の美術界に大きな反響をもたらしてきた。

そのなかで台湾は、一九八三年に台北市立美術館が、今年の五月にはその第二美術館にあたる「台北当代美術館」が設立されたばかりで、現代美術としても歩みはきわめて浅い。だが、台湾人作家たちは公的な美術館以外に、台北の「伊通公園」や「二号公寓（現・新樂園）」や「華山芸文特区」、台中の「二十号倉庫」などの私的な場で作品を意欲的に発表し続け、作家同士の強力なコミュニティを築きあげてきた。

また政府も、文化行政の五大原則（尊重、多元、本土的、永続的、国際的）のもとに、台湾の現代美術を世界の芸術界に積極的に発信してきた。

これらを母胎にして近年、台湾人作家はイタリアのベネチア・ビエンナーレを代表とするさまざまな国際展に登場するようになった。かれらはそこで、アジアでも屈指のビジネスアルな完成度を持つとの高い評価を受けてきた。

今回、本展に出品した五人の作家（王俊傑、姚瑞中、顧世勇、王德瑜、朱嘉樺）は世界で活躍し、いずれも台湾を代表する美術家たちである。ここで主な作品を紹介しよう。

王俊傑は今までコンピュータやインターネットを駆使してメディアと

消費文化の関係を追求してきたが、本展の作品「微生物学協会：クローニング・プロジェクト」は、地殻変動により海を失い、生存の危機に直面した人類を想定して作られている。「微生物学協会」が開発した衣服を着れば、五年間は洗濯不要で、現代人が抱え込むストレスはたちどころに解消され、慢性的症状も軽減されるという。会場にはそれらの衣服がデパートの売り場のように陳列されていた。それが虚構の世界であると知りながら、まことしやかな宣言文句につられて、ついその気になつてしまふのはなぜなのだろう。人間の欲望とは、氾濫する情報社会により生み出され、果てしなく肥大化していくのだろうか。しかし、地球温暖化による自然環境の破壊が言われ、また米国の同時多発テロ事件に遭遇した現代人にとり、この作品はもはや単なる現代のパロディーとは捉えられないであろう。

そんな漠然とした不安を抱く現代人の心を癒してくれるのが、王德瑜の「作品41」だ。人と空間の相互関係を作品にしてきた彼女は、展示室

を膨らませる。

作品は、あたかも遊園地の乗り物のようだが、ひとたびそのバルーンの中に入ると、外界とは隔絶された神秘的な空間を体験することになる。それは肉体だけが知っている、遠い胎児の記憶が蘇ってくるような感覚に似て、身も心も言語や観念の彼方にある、瞑想的な安らぎの中に包まれていく。この作品は、ハイテク化

のなかで生きる現代人の肉体の五感を刺激して、すでに失いつつある人間の原初的な体感を呼び戻し、純粋な個としての存在の確認を求めている。



姚瑞中の作品「野蠻聖境」
(写真提供：水戸芸術館現代美術ギャラリー)

またさまざまな作品を発表してきた。会場に展示された作品には、九十年代から姚自身が撮り続けた台湾の街の風景（二十景）が映し出されている。だが、それは喧騒でにぎわう街の情景とは裏腹の、すべての生物が死滅し、世紀末を思わせる荒涼とした風景だ。そこでは救世主の神仏も、たんなる造物にすぎない。だがそれらとは対照的に、一景の片隅に蘭嶼島に住む先住民のヤミ族たちが鎧に身をかため、ものすごい形相で死闘しているのが見える。そのあらしを作品の前で、仁王立ちしたキックの巨大な金の怪物が威嚇しながら見ている。

特殊合成された写真に金箔を張った大画面は、会場をあたたかも廟の祭壇のような厳かな空間に変貌させて、見る者を圧倒させる。台湾人は信仰心の厚い民族だが、この島の四百年にわたる歴史は、外来政権に翻弄され続けた苦難の道程とも言え、信仰こそがかれらの唯一の拠り所であったに相違ない。その台湾の一般的な宗教は、仏教と道教が渾然一体となり、寺や廟では釈迦牟尼仏や観音菩薩とともに、道教の神々が祭られている。作家は、祖先の先達たちが手をあわせて拝み、台湾人の思いの聖も濁をもすべて吞み尽くしてきた民間宗教を文脈にして、台湾とは、台湾人とは何かを問い直そうとする。

台湾人は、亜熱帯風土特有の民族的なおおらかさで、この作品の画面のように、いつの時代も雄々しく闘ってきた。先進諸国が目を見張るほどの経済発展と民主化を成し遂げたのは、かれらの不断の努力と忍耐にはかならない。

新世紀を迎えた今日、世界はますます混沌とした様相を見せている。経済、通信、交通などの面では国際社会のグローバル化を加速させ、その一方で民族主義が著しく台頭

しつつある。水戸芸術館の浅井俊裕氏は、現代美術は「自分探し」であると言う。いまこそ現代人は、個々の「自分探し」、ルーツをたどるべきではないのか。台湾人作家の姚のごとく、ここに生を享けた者が、みずからの民族の根を掘り下げ、内なる孤独のなかで己の姿を直視することこそ、もっとも求められているのではないだろうか。

本展を見学された台北駐日経済文化代表処の陳燕南・文化組長は「これからのアートの表現は、いま以上にバイオテクノロジーの領域に入らなければならない」と鋭い分析をなされた。人間の英知に託された人類の未来とは、はたしていかなるものなのだろうか。限りなく不透明な時代に、鋭敏な感性で力強いメッセージを発信する台湾の作家たちは、今後ますます世界の美術界をリードしていくことになるだろう。

本誌の記事を他の刊行物に転載される場合は、本誌から転載の旨を明記の上、掲載紙（誌）を三部必ず当社あてにご送付願います。ただし、他紙（誌）からの転載記事の再転載は固くお断り致します。（中華週報社）